

# アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛

## —第8巻にある回心する心の心理学的な分析—

九里 秀一郎<sup>※</sup>

### 要約

本論は、アウグスティヌスの三位一体論が隣人愛をどのように描くか考察する第二の論文である<sup>1</sup>。愛の三位一体論とも言える独自の神学が彼のテキスト第8巻から始まり、精神の三一性モデルが最終第15巻で確立する。記憶・知解・愛または意志からなるこのモデルは三位一体の神の優れた類比である。しかし、このモデルは自己愛の強い印象があり、隣人愛との関係は明らかではない。そこで本研究は、このモデルと隣人愛の関係について、関係する議論と根拠としている聖書の引用に着目して調査している。本論は、第8巻の第3章から5章を対象とし、アウグスティヌスの初期の考察を扱う。彼は回心について心理学的な分析を行い、「精神」「善い心」「意志」からなる三一性によって心が善に向かうのが回心と考えた。そして、彼は善を愛する心と神を愛する心を対比して独自の三位一体論の基本構想を描いた。また、彼は理性で知ることと信仰で信じることが相補的であると理解し、見えない神を知る方法が“類似と比較”であることを見出した。これらは隣人愛を三位一体から理解する時の重要な視点である。

キーワード アウグスティヌス 三位一体論 隣人愛 第8巻

### 目次

1. 序論
    - 1.1 本研究の目的
    - 1.2 精神の三一性に対する後世の評価
    - 1.3 第8巻が重要である理由
  2. 方法
  3. 結果
    - 第4章 知られないものが愛され得るか。
    - 第5章 神を知解する類似と比較が問われる。
  4. 考察
    - 4.1 回心する心の三一性。
    - 4.2 最高の善を分有する心の三一性。
    - 4.3 見ぬものを信じ、望み、愛する。
    - 4.4 類似と比較による探求方法。
  5. 結論
- 凡例  
引用文献・注  
参考文献  
図表

## 1. 序論

### 1.1 本研究の目的

『三位一体論』<sup>2</sup>は全15巻から成り、第8巻以降にはアウグスティヌス独自の考察がなされる。彼の三位一体論は愛に根差した精神の三一性モデルの構築である。このモデルは記憶・知解・愛または意志からなる精神の三一性で<sup>3</sup>、神の似姿の類比である。筆者は、隣人愛の観点から三位一体論に社会福祉の接点を見出したいと考え、これまで第15巻を中心に考察してきた<sup>4</sup>。しかし、最終的なこのモデルは、第8巻から始まる議論の展開の中で、いつのまにか自己愛のモデルとなった印象があり、隣人愛とのつながりは明瞭では無い。

そこで本研究は、精神の三一性モデルと隣人愛の関係について、このモデルの成立までに関係した多くの議論、および聖書の根拠に着目して調査している。本論は、「三位一体論が描く隣人愛」を主題として、第8巻を対象とした第二の論文である。先の論文では「信仰と真理の形而上学的対比」を副題として、三位一体の信仰規則と彼の善の思想を考察した。今回は「回心する心の心理学的な分析」を副題として、心の三一性から始まる初期の議論を検討する。

アウグスティヌスは聖書と人間の精神の二つを省察の対象として探求する<sup>5</sup>。精神の探求は、後に心理学的三位一体論と呼ばれ<sup>6</sup>、神の似姿を人間の精神に求める。この方法は次のパウロの言葉を根拠とする<sup>7</sup>。

**世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。(ロマ1:20)**

この聖句は自然科学だけでなく<sup>8</sup>、被造物として人間を対象にすれば、人文系、社会系科学等の聖書的根拠に成り得る。本研究は、アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛を社会福祉学に適用しようとするところに特色がある。彼の三位一体論は愛に根差し、理性と信仰が調和した優れた神学であり、彼以外の人間が書いた三位一体論では代えることはできない。

アウグスティヌスは、キリスト教の確立期である4～5世紀に、約二十年に及ぶ年月をかけて三位一体論を執筆した。その目的について彼は次のように記している。「三位一体の神について語られ、信じられ、知解されることに対する根拠を提示し<sup>9</sup>、聖書の権威によって信ずる者だけでなく、知解する者にも論証し<sup>10</sup>、そして、敬虔にしてゆるぎない、合意を読者から得ることを願う<sup>11</sup>。」筆者はこのような、ある意味で科学的な三位一体論に、社会福祉学の新しい可能性が見出されることを願っている。

### 1.2 精神の三一性に対する後世の評価

第15巻最後にある祈りの言葉から、アウグスティヌス自身が精神の三一性モデルに満足していることが分かる<sup>12</sup>。しかし、精神の三一性にはさまざまな後世の評価がある。現代の著名な神学者マクグラスによれば、カール・バルトは最高の評価を与えているが、カルヴァ

ンは「役に立つかどうか分からない」と冷ややかであったことを紹介している<sup>13</sup>。しばしば指摘される弱点として、「人間の精神が、このように全く安易に小綺麗な仕方ですべての実体に引き下ろされるものではない」という説を紹介している。確かに、カルヴァンもこのような観点から批判したようにも思われる。マクグラス自身は、「アウグスティヌスはこうした類比の価値の限界を強調するけれども、彼自身はこの批判的評価が許す以上に類比を利用しているように思われる。」と語り、ヨハネによる福音書の解釈の一例ではないかと提案する。確かにヨハネによる福音書からの引用は圧倒的に多いが<sup>14</sup>、筆者にはパウロの影響も計り知れないように思う<sup>15</sup>。

神へ帰還する神秘思想という伝統的な評価もある<sup>16</sup>。精神の三一性から神の三一性へと上昇する神秘的条件が三位一体論であると言う。著名なアウグスティヌスの研究者である服部英次郎氏も、「三位一体論はアウグスティヌスの心理学を知るための主要な源泉」<sup>17</sup>としながら、「精神の三一性は神の三一性そのものにはるかにおよばない。アウグスティヌスの三位一体に関する考察は、ついに神秘主義とならざるを得ない。」と語る<sup>18</sup>。神と人が一つになる体験を神秘主義の特長とするならば、身近な精神の三一性モデルは同様な体験を容易に提供するであろう。しかし、理性と信仰の両方の調和を重視するアウグスティヌスの立場からすれば、一方の信仰的な神秘主義だけを強調することは出来ない。別の観点からすれば、このような多様な評価が現代まで続いていることは、精神の三一性に未だ見えない価値が存在する証拠ではなかろうか。

### 1.3 第8巻が重要である理由

第8巻はアウグスティヌス独自の三位一体論の序論と考えられ、後半の最初にある重要な巻である。ここではその点を具体的に示して、第8巻を論ずる意義を確認する。

#### (1) アウグスティヌス自身による説明

第8巻の「愛」と第14巻の「知恵」が、アウグスティヌスの三位一体論の核であり、第8巻以降のテーマは精神の三一性である。それは、第15巻3章にある第1巻から第14巻までのまとめ(表1)<sup>19</sup>、および、第15巻6章にある第8巻から第14巻までの議論の整理から明らかである。

初めて三位一体が知解力に現れたのが第8巻で、「神は愛です」という言葉に気づいた時、三位一体が、「愛するもの、愛されるもの、愛」という三一性と共に微光を放ったとある<sup>20</sup>。第9巻から第14巻までは三位一体が見えず、第8巻と同様な発見が第14巻の「知恵」に見出されて、私たち人間のうちにある三一性について自信を持って語る<sup>21</sup>。これらの説明によって、第8巻と第14巻の大きな発見によって第15巻の精神の三一性モデルが完成したと言える。

第8巻と第14巻の重要性は、筆者の行った調査研究によれば<sup>22</sup>、この二つの巻に特別な聖句の引用があることから知ることができる。アウグスティヌスは、次の使徒言行録17章27, 28節の一部を意図的に変更した引用を全巻で4回行っている(表2)。

実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。皆さんのうちのある詩

人たちも、／『我らは神の中に生き、動き、存在する』／『我らもその子孫である』と、  
／言っているとおりです。(使17:27, 28)

第8巻では「神の中に生き」という部分を「善の中に生き」と変えて引用する。これは、彼の自叙伝『告白』に詳しくあるように、善に関する彼の根本的な思想の表現である。第4巻では「神の中に生き」という部分を、それぞれ「その生命の中に生き」、「この創造主においてこそ生き」に代えている<sup>23</sup>。前者は、しばしば引用されるヨハネによる福音書の最初にある「万物が御言において造られ、御言において命である」部分を思い起こさせる(表4)<sup>24</sup>。後者は、創造主が他の動物と異なって人間にのみ理性的な精神を創られたという彼の解釈を表現している<sup>25</sup>。第14巻には、私たちの精神に注目する意味で、聖書通りの引用が一つある<sup>26</sup>。残りの一つは、私たちの「精神」が神の中に生き、動かされ、存在するというように、「精神」を強調する。これは第4巻と同様に、人間の精神こそ被造物としての人間の特徴であるという彼の基本的な主張を改めて強調する<sup>27</sup>。これらの特別な引用は、アウグスティヌスが自身の思想を明確に示すために第4巻、第8巻、第14巻に置いた道標のようであり、これらの巻の重要性を物語っている。

## (2) 第8巻の構成と重要な聖句の配置

第8巻には、拙論で示した重要な聖句が引用されている<sup>28</sup>。重要な聖句とは、上記の意図的な引用の他に、特に長い聖句の引用(表3)、引用聖句データベースの統計処理によって抽出された7つの聖句である(表4)。これらは、アウグスティヌスの独自の三位一体論における主要な聖書の根拠と見做されるものである。

第8巻の引用聖句デジタルデータベースから作成した表(表5、表6)、および、全文デジタルデータから作成した使用単語の頻度表を参考にすると(表7)、第8巻について次の四部構成が考えられる。

第8巻の構成

部	章	見出し	聖句の引用数	重要な聖句	根拠
I	序	信仰の真理。	0		
	1	真実と偉大さ。	0		
	2	人間の心の物的性質。	2		
	3	善の中に生き、動き、存在する人間。	2	使17:27,28	表2
II	4	知られないものが愛され得るか。	5	I コリ13:12	表4
	5	神を知解する類似と比較が問われる。	0		
III	6	なぜ私たちが使徒を愛するのか。	1		
	7	愛について先ず考究すべきである。	14	I ヨハ4:16	表4
	8	誰でも兄弟を愛すべきことは知っている。	7		
	9	なぜパウロの言葉に心が燃えるか。	9	II コリ6:2-10	表3
IV	10	聖書の愛は善の愛である。	0		

3章の聖句は、上記で示したとおり、神を善に置き換えた特に重要な引用である。4章の聖句は、全巻で最も引用される「鏡におぼろに映ったもの」である。この聖句は、三位一体を探求する方法に関係する。7章には「神の愛」、9章には例外的に長いパウロの言葉の引用がある。これらは愛に関するⅢ部の議論の中心的聖句と考えられる。Ⅳ部には簡潔な結論があり、要点は次の通りである<sup>29</sup>。

- ①聖書の愛は善の愛である。
- ②愛する人の愛には、愛する人と愛されるものと愛の三つがある。
- ③愛とは二つを一つにし、あるいは一つにしようとする或る生命である。
- ④精神に問い求める場所を見出した。

これらの項目とⅠ～Ⅲとの関連は容易に見当がつけられる。このように、引用聖句から三位一体論を眺めると、聖書との関係だけでなく、各部分の構成、各部分の相互関係など、非常に全体像が見やすくなる。

### （３）第８巻から始まる三一性の探求

三一性は、第８巻から始まる三位一体論後半の主要なテーマである。このテーマは形而上学的な観点において<sup>30</sup>、神の三位一体と似た三一性を私たちが知っているものの中に探求することである。様々な三一性についての議論が第15巻まで続き、記憶と知解と意志または愛の三一性が三位一体の神の類比であると語る。本論では、この最終的な精神の三一性を三一性モデル（模型）と呼んでいる。

上記の（１）では、第８巻にある「善」と第14巻にある「知恵」を核として、次のような三一性の議論の展開が確認された。まず第８巻で最初の三一性が提案される。次の第９巻では、ほぼ最終の三一性モデルに近い形が提案されるが<sup>31</sup>、それをただちに結論とはせず第10巻から第14巻まで慎重な検討がなされる。そして、最後の第15巻において、不足分の考察と理論の限界を論じて最終的な三一性モデルに至る<sup>32</sup>。このような経過から、以下のような三段階のプロセスを考えることができる。

三一性の三段階プロセス

段階	実体 1	実体 2	実体 3	対象	引用
1	愛する人	愛されるもの	愛	第 8 巻	8:10:14
2	精神	精神の知	愛	第 9 ～ 14 巻	9:12:18
3	記憶	知解力	意志または愛	第 15 巻	15:20:39

ここでは三つの要素を最終の三一性モデルに合わせて三つの実体で表した。各段階の三一性は、これ以外にもある様々な三一性の表現の中から相応しいものを示した。第１段階の「愛する人 愛されるもの 愛」という表現は、三一性の議論を開始する第８巻の結論であり、本稿でさらに詳細に論じられる。次の第２段階の「精神 精神の知 愛」は<sup>33</sup>、第１段階の「愛する人」が「精神」に、「愛されるもの」が「精神の知」に変化した形である。精



神の知とは、学問の探求によって得た知識のように、私たちが知ろうと欲して精神に得たものである。第3段階は最終第15巻の結論であり、「記憶 知解力 意志または愛」の三一性である<sup>34</sup>。「精神」が「記憶」に、「精神の知」が「知解力」に、「愛」は「愛または意志」へ変化する。これが、求めていた父と子と聖霊に対する三一性モデルである。

## 2. 方法

本論は第8巻を対象とする第二の論文として、前回とまったく同様の方法で第4章、第5章の要約を行い結果にまとめる。考察では、前回も対象とした第3章について、三一性の原初的な姿をより明確にするため、改めて検討を加える(4.1, 4.2)。三一性が三位一体論後半の主要なテーマであることが今回再確認されたからである。続いて、三位一体の初期の方法論を第4章、5章をもとに検討する(4.3, 4.4)。本稿の序論で示したように、第8巻は三位一体論15巻の中で重要な位置づけを持っている。その点を十分踏まえ、あまり各論に執着せず、全体的視点から三位一体論と隣人愛のつながりを探ることがポイントである。

## 3. 結果

以下は、アウグスティヌス『三位一体論』<sup>2</sup>第8巻第4章、5章の段落ごとの要約である。第一論文と同様の方法で、第8巻全文デジタルデータを使って編集した。

### 第4章 知られないものが愛され得るか。

#### 8:4:6:1 善の現臨を享受するために神を愛する。

しかし、私たちが存在せしめたまうこの善の現臨を享受するためには、愛によってこの善のもとに立ち留まり、この善に固着しなければならない。この善がなければ私たちは存在することが出来ない。たしかに私たちはまだ「顔と顔を合わせて」(I コリ13:12) 神を見まわっていない。しかも、私たちが今、神を愛さないなら、決して神を見ないであろう。

#### 8:4:6:2 誰が知らないものを愛するであろうか。

しかし、誰が知らないものを愛するであろうか。私は問う。知られないものが愛され得るであろうか、と。もしそれが可能でないなら、誰も神を知る前には愛さないことになる。神を知るということは、彼を精神によって観て確固として認めることでないなら、何であろうか。まだ見ぬものを信じ、信じるものを望み愛する心においてでなければ、あの信仰、希望、愛(I コリ13:13)はどこにあるのであろうか。この三つを心に建てるために聖書全体の仕組みが協力するのである。だから、知られずとも信じられるお方が愛される。しかし、心が、見ないものを信じつつ存在しない或るものを自分で作り出し、そして虚偽なるものを望み愛することのないように警戒しなければならない。

#### 8:4:7:1 読んだり聞いたりして物体の表象を作る。

書物で読んだり、あるいは聞いている或る物的なものを信じる時、心は物体の特徴や形の或る表象を作り上げる。この表象を信じ保持しても有益ではないが、これによって示唆

されることは或る他の有用な知識のためには有益である。

#### 8:4:7:2 信仰の関心は表象より人物の生涯や業にある。

使徒パウロが書いたものや、彼について書かれたものを読んだり聞いたりする人が心のうちで使徒自身の顔を、またそこに名が挙げられているすべての人の顔を思い浮べる。しかし、私たちの信仰の関心は、どのような顔をもっていたかではなく、彼らの生涯に、また聖書が証言する彼らの業にのみ存するのである。私たちがキリストの人間としての御姿について何を思惟するかということが有益である。すなわち、人間の本性に、いわば規範のように或る知識が刻印されており、それによって私たちはこのようなキリストの御姿を見ると、直ちに人間あるいは人間のかたちであることを知る。

### 第5章 神を知解する類似と比較が問われる。

#### 8:5:7:1 信じる時神の知識によって思念が形成される。

謙虚の模範を与えるため、かつわれらに対する愛を明らかにするため、神がわれらのために人間として造られたことを私たちが信ずるとき、私たちの思念はこの知識によって形成されるのである。私たちは神の不思議な業と復活の力を信ずる。そして本性に生得のもの、あるいは経験によって集められたものであれ、事物の種的・類的な知識によって、私たちはこの類いの出来事について私たちの信仰が虚偽ならざるように思惟するのである。

#### 8:5:7:2 種的・類的な知識によって神の不思議な業を思念する。

私たちは処女マリアの顔を知らない。私たちは、あのラザロがどのような身体つきをしていたのか、知らないし、さらにベタニアも、主御自身が昇天されたオリーブの山も見えていない。私たちの誰も、これらのものを見ていないし、これらが私たちの思念のように存在しているかどうか全く知らないのである。しかも、私たちはこれらのことを極めて確固として信ずる。なぜなら、私たちは私たちにとって確実である種的・類的な知識によってこれらのことを思惟うからである。私たちは主イエス・キリストがマリアと称ばれた処女から生れたまうたことを信ずる。処女とは何か、生れるとは何か、固有名詞とは何か、ということは信ずるのではなく、まさしく知るのである。おそらくキリストは処女から生れたまうたであろう、とは誰も健全なキリスト教信仰によって語り得ないのである。

#### 8:5:8:1 いかなる類似と比較に基づいて信じるかが問われる。

それで、私たちは三位一体の永遠性、等しさ、統一性を許される限り知解したいと強く欲する。しかし私たちは三位一体を知解する前に信じなければならない。それでは、私たちが知らないあの三位一体を私たちはいかにして信じることによって愛するのであろうか。それは、私たちに使徒パウロを愛するようにさせる種的・類的な知識によってであらうか。私たちに刻印されている類似の規則によって、あるいは種的または類的な知識によって、私たちが経験しているいわば多くの三位一体のように知るのであろうか。それとも、今までに見たことがないような三位一体を信じつつ愛し得るのであろうか。それとも、私たちが愛するのは、この三位一体は神であるということであらうか。しかし、知られているもののいかなる

類似と比較に基づいて、まだ知られていない神をも私たちが愛するように信ずるのであるのか、ということが問われるのである。

#### 4. 考察

##### 4.1 回心する心の三一性。

第8巻3章には、三位一体論の中で最初の三一性が示されている。この三一性は、アウグスティヌスの回心の体験にもとづくもので、私たちにたいへん身近なものである。この三一性は、回心する心を信仰的、心理学的に考察したもので、以下のように「実体1」「実体2」「両者の関係」という三つの要素で表現してみよう。

回心する心の三一性

実体1	実体2	両者の関係	参照場所
魂	魂の善	愛することによって固着する。	8:3:4:2
心	善き心	善き心であるため意志を働かす。	8:3:4:3
心	自分でない或るもの	回心する。	8:3:4:3

「実体1」は「実体2」を部分に含むような実体である。「両者の関係」とは、実体1と2を結ぶ関係で、最終的には、三位一体との類比から一つの実体と考えられるが、この段階では「関係」に過ぎない。「魂の善」は、私たちが善を判断する基準で、これによって、善であるかどうか区別する<sup>35</sup>。善の普遍性に関するプラトン派の思想に由来するもので<sup>36</sup>、善の観念が私たちに刻印されていると考える。続く、「心」「善き心」「意志」の三一性は、「善き心であるためには、自分の意志を働かせる」日常的なレベルから、「心が熱心に意志を働かせ、そして善き心となるなら、それは心が自分でない或るものに向って回心する」という超越的な次元まで機能する<sup>37</sup>。これは、心の中に自分ではない或るもの、すなわち神の存在を示唆している。この原初的な三一性が、第8巻最終章で「愛する人 愛されるもの 愛」という形になり、やがて三位一体の神の似姿の類比へと発展するのである。

以上のように、回心する心の三一性は相互作用する二つの実体である。アウグスティヌスは第2章で物体についても形而上学的に扱っているので、三つとも形而上学的な実体と考えていたのかもしれない。実際、次の第8巻6章から9章で論ずる「形相」の概念は相互作用を実体化する方法のひとつとも考えられる。この点からすると、アウグスティヌスの三位一体論は、「二つの実体と一つの相互作用の関係」を「三つの実体と一つの間（本質）」と理解するプロセスのように思える。現代物理学の場の量子論を構築するような話であるが<sup>38</sup>、紙幅の関係で次の機会に論じたい。

##### 4.2 最高の善を分有する心の三一性。

3章5節には第一論文でも扱った神と善に関する議論がある<sup>39</sup>。この節の冒頭では、「変ら



ざる善が存在しないなら、いかなる移ろいやすい善も存在しないであろう。」と、善の普遍性が提起される<sup>40</sup>。変わらざる善とは、「善そのもの」、「最高の善」、「心たらしめる善」などと表現される。「移ろいやすい善」とは、私たちが体験する様々な善のことであり、基準が相対的で他との比較によって価値に増減がある善である。主張していることは、私たちの善は移ろいやすいが、私たちの心は変わらざる善を分有していて、意志によって善を完成させるように働くという点である。善を分有する私たちは、普遍的な善の中で生き、動き、存在するというのが彼の思想である。この節では、魂の善と対比する形で、最高の善の分有する三一性を次のように表現する。

最高の善を分有する心の三一性

実体 1	実体 2	両者の関係	参照場所
君	分有する善	神を観る。浄福にされる。	8:3:5:1
心	変わらざる善	回心する。	8:3:5:2
心	最高の善	意志によって離反する。	8:3:5:2
心	存在の根拠	在り方を廻らそうと意志する。	8:3:5:2

最初の三一性は、「君が分有する善において、君は善そのものである神を観るであろう。」という一文から要素を抽出したものである。これは明らかに信仰の表現であり、それ以外でも、「心はもともと善であった。」、「心は神から誕生し、神に向かって完成する。」という表現も信仰の表現と考えられる。しかし、信仰者以外には分からない表現とは言えないであろう。神の代わりに最高の善、神の似姿ではなくて最高の善を分有する人間という対比は誰にでも容易に理解できると思われる。善は形而上学的な存在の一例であって、最高の善が存在しうるが、それを神であると言っている訳ではない。神を最高の善にたとえることが信仰理解に役立つという主旨である。

#### 4.3 見ぬものを信じ、望み、愛する。

第4章6節の始めに、三位一体論全体で最も多く引用される次のパウロの言葉の一部がある(表4)。

わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。(I コリ13:12)

引用されるのは「顔と顔を合わせて」の部分である(8:4:6:1)。一部にせよ、第8巻でこの聖句が引用されるのはこの一か所だけである。神は「鏡におぼろに映ったもの」、「一部」として見るのであり、その時まで「はっきり見えず、知られない」のである。その時とは信仰上の終末の時である。この聖句にある、「見る」「知る」は、私たちが物を見る、知るのと同じように神を見る、知ることであり、それには限界があることをこの聖句は語る。この引

用に続いて、「誰が知らないものを愛するか。」と問い (8:4:6:2)、ただちに、信仰においては知らなくとも愛されることを次のように語る。

まだ見ぬものを信じ、信じるものを望み愛する心においてでなければ、あの信仰、希望、愛 (I コリ13:12) はどこにあるのであろうか。この三つを心に建てるために聖書全体の仕組みが協力するのである。だから、知られずとも信じられるお方が愛される。(8:4:6:2)

「誰が知らないものを愛するか。」という問いは、問いの形によって、「誰も知らないものは愛さない」ことを主張しているとも考えられる。ところが、「人は知らなくとも愛する」と対立命題を提起されるのである。良く知られたアウグスティヌスの信仰と理性に関する神学の方法論がここに見られる<sup>4)</sup>。すなわち、信仰においては、「人は知らなくとも愛する。」のであるが、理性では「愛するためには知らなければならない。」のである。しかし、第4章、5章では「愛する」、「知る」、「見る」、「信じる」などの用語が多く用いられ (表7)、聖書の出来事から人はどのような知識を得るかについて検討される。

#### 4. 4 類似と比較による探求方法。

第4章後半から第5章は (8:4:7~8:5:8)、三位一体を知る方法について、試行錯誤のような厳しい議論が展開する。聖書を読んで何を知り得るのか種々の検討がなされ、そのような方法では三位一体の神を知ることはできないと結論付ける。その結果、3章から行っている神と善の関係に対する議論の様に、類似と比較による探求が正しいことを暗に証明する。

最初に、使徒パウロが書いたものや、彼について書かれたものを読んだり聞いたりした時、心に益となるものは何かを問う。その答えは、物の特徴や形に関する表象を描くこと、信じたり望んだりする知識が考えられると語る。これは、一般論として聖書に限ったことではない。次に、聖書に記されたイエス・キリスト、処女マリアからキリストが生まれた話について、そこから何を知り、何を信じるのか問う。その答えは、確実である種的・類的な知識によって私たちはこれらのことを思惟うことができると語る。私たちは知らずとも、経験や獲得した知識から類推して信じる事が出来ることを論ずる。

しかし、三位一体の神に似たものを私たちは知らないの、私たちが知っているものから論証することは不可能であると言う。そうすると、信じる事が先になることを次のように語る。

私たちは三位一体の永遠性、等しさ、統一性を許される限り知解したいと強く欲する。しかし私たちは三位一体を知解する前に信じなければならない。またその際、私たちの信仰が虚偽ならざるように目を覚ましていなければならない。たしかに私たちは淨福に生きるためにはこの三位一体を享受しなければならないのだ。(8:5:8)

次の問いは、信じる事が先としても、どのように愛するかを問題にする。

それでは、私たちが知らないあの三位一体を私たちはいかにして信じることによって愛するのであろうか。それは、私たちに使徒パウロを愛するようにさせる種的・類的

な知識によってであらうか。(8:5:8)

このような信仰を基本にしつつ、一方では信仰を理解しようとする冷静な視点に立った時、三位一体を探究する方法について、次のような考え方に到達する。

知られているもののいかなる類似と比較に基づいて、まだ知られていない神をも私たちが愛するように信ずるのであろうか、ということが問われるのである。(8:5:8)

この類似と比較による探究方法によって、最終的に第15巻で精神の三一性モデルが完成する。もともと聖書は例え話で語る場合が多く<sup>42</sup>、その手法を三位一体の神の論証に拡張したまでの話で、当時としては広く知られた手法であったと考えられる。

## 5. 結論

序論では、『三位一体論』全15巻の中で第8巻がどのような位置づけにあるか確認した。アウグスティヌス自身による各巻の主旨のまとめ、および、筆者の作成した引用聖句データベースを使った重要聖句の分析によって、次の二点が明らかになった。

①第8巻の「善」、第14巻の「知恵」は三位一体論の重要な核であること。

②第8巻から始まる三一性の議論は第15巻の三一性モデルに収束すること。

この結果は、第8巻を考察する意義を明確にし、善と知恵を核として、三一性の視点から隣人愛を考察する必要性を喚起する。

今回、広範な検討を序論に加えたが、本稿は基本的には第一の論文と同じ構成とした。第8巻の要約を結果に掲載し、その部分を中心に考察を行うスタイルである。前回に続いて第4章、5章を要約し、第3章～第5章を対象として、三一性の原初的な姿、初期の方法論について考察した。結論は以下の通りである。

①アウグスティヌス独自の三位一体論は、善に向かって回心する心の心理学的分析から始まり、見出した三つの要素を、彼の信仰と善の思想にもとづき解釈する。

②三位一体の探究では、人が聖書において信仰、希望、愛を求める時と同じ様に、知ることと信じることが相補的に働く。

③三位一体の探究は、神を見て知ることが不可能である以上、どのような類似と比較を提示するかが課題である。

以上は、三位一体論にもとづく隣人愛の探究においても重要と考えられる。すなわち、「善を求める回心と信仰」「類似と比較によって理解し信じる理性と信仰」が重要なテーマである。第6章以降は愛がテーマなので、これらを含めて改めて考察の機会を持ちたい。

## 凡例

- ・ 聖書は日本聖書協会「新共同訳聖書」を使用。聖句の引用は、文書省略名に続いて章と節をコロンの区切り表示。
- ・ 参考文献リストの文献引用は、書名を省略し文献リストの通し番号を〔 〕内に表示。
- ・ 『三位一体論』の引用は、巻、章、節をコロンの区切りカッコ内に表示。段落を表示する

時は、節に続いてコロンを置き、節ごとに最初から付番した段落通し番号を表示。

例：(8:1:1) 第8巻1章1節、(8:1:1:2) 第8巻1章1節2段

- ・拙著研究ノート〔3〕〔4〕〔5〕に分かれて収録されている第15巻要約の引用は、要約通し番号と要約対象部分を併せて表示。

例：2) (15:2:2-3) 要約通し番号2)、要約対象第15巻2章2節～3節。

## 引用文献・注

- 1 〔7〕：同一主題の第一論文。
- 2 〔1〕：テキストに用いた日本語訳。
- 3 「三一性」という用語はキリスト教の三位一体の神と区別するために、私たちが一般的に用いる三位一体の意味で用いられる。例えば、テキストでは「私たちが経験しているいわば多くの三位一体」(8:5:8) という内容は、「私が先ず被造物において、それ固有の或る種の三一性をとおして、いわば段階的に上昇し」(15:2:3) とで表現される。「三位一体が愛するもの、愛されるもの、愛という三一性と共に微光を放った」(15:6:10) という表現も、違いが明瞭である。
- 4 〔3〕〔4〕〔5〕〔6〕
- 5 「私は神の実体を、あるいは聖書をとおして、あるいは被造物をとおして、問い求めるのに怠惰ではないであろう。この聖書と被造物の二つが私たちの省察の対象として提供されているのは、この聖書に靈感を与え、あの被造物を創造された神ご自身が問い求められ、神ご自身が愛されるのである。」(2:序:1)
- 6 〔9〕 p.455
- 7 〔3〕 p.34、拙著〔6〕で論じた7つの聖句(表4)の一つ。
- 8 〔4〕 p.9：注16) ～23)、カルヴァンやニュートンなどに影響を及ぼしている。
- 9 「このようなわけであるから、われらの主なる神の祐けを受けて、わが力の及ぶかぎり、聖三位一体は唯一の真の神であること、また、父と子と聖霊は同一の実体あるいは本質であると正当にも語られ、信じられ、知解されること、に対する根拠を—そのことを私たちは強く求められているのである—提示したい。」(1:2:4)
- 10 付録〔3〕 1) 「人間は動物にもある魂の他に、理性的・知解的な優れた魂の特性を持っている。それだから神の似姿なのである。私たちが本性を超えて、ある存在、真実な存在を問い求めるなら、創られずして創る本性としての神がいるのである。この本性が三位一体であることを聖書の権威によって信ずる者だけでなく、知解する者にも論拠に基づいて論証しなければならない。」(15:1:1)
- 11 「私はわれらの主なる神の前で、私の著作全体、とりわけ御父と御子と聖霊なる三位一体の統一性が問い求められているこの著作で、敬虔にしてゆるぎない、合意を読者に得たく思う。」(1:3:5)
- 12 付録〔5〕 p.123 「あなたは私があなたを見出すことが出来るように創造されました。いよいよ深く豊かに見出すようにという希望をお与えくださいました。」(15:28:51)
- 13 〔9〕 p.455, 456
- 14 〔7〕 p.47、新約聖書の引用数は全巻で1046、その内ヨハネによる福音書は266で、他の聖句と比較して圧倒的に多い。
- 15 重要な聖句(表2～6)には、パウロの言葉も多い。
- 16 〔2〕 p.132

- 17 [8] p.112
- 18 [8] p.131
- 19 「各巻で論議によって認識にまで導いたことをすべて、論議無しに簡潔に集め、いわば精神の一瞥のもとに、証明の根拠ではなく、証明された真理を置くようにしたい。」(15:3:4)
- 20 付録[3] 6)「・・・第8巻では、さらに神の本性を言論によって知解することを高めようとしたが、それは身近に存在する光のようであるが、精神の眼差しがこの光を確実に見ることができず、まだ三位一体は現れなかった。そこには或る質量的な集塊は存在しないことを何とか認めただに過ぎない。しかし、私たちが聖書において『神は愛です』(Ⅰヨハ4:16)と言われるその愛に到達した時、三位一体が『愛するもの、愛されるもの、愛』という三一性と共に微光を放ったのである。そこで、私たちは論議の途中で神の似像として創られた人間の精神そのものの考察に戻ったのである。第9巻から14巻は、私たち自身もそうである被造物のところに『神の不可視性を、造られたものをとおして知解して見る』ために知解力を修練したが、神なる三位一体を観ることは不可能である。」(15:6:9)
- 21 「しかし私たち自身でない不可変的な善を私たちが観るということは第8巻が示している。第14巻は、人間が神から受領する知恵について私たちが語るとき、そのことを想起させたのである。それでは、なぜ、そこに私たちは三位一体を認識しないのであろうか。神とよばれるこの知恵が自らを知解しないのであろうか、自らを愛さないものであろうか。誰が、このように語ろうか。また、誰が知識のないところには決して知恵もないということを見ないであらうか。また、神なる知恵が他のものを知り、しかも自己自身を知らなかったり、あるいは他のものを愛し、しかも自己自身を愛さないと思うべきだろうか。もしこのようなことを語ったり、信じたりすることは愚かであり、不敬虔であるなら、視よ、だから、三位一体、すなわち知恵とその知識とその愛があるのだ。かくて、私たちは人間のうちにも三一性、すなわち精神と自己を知らしめる知と自己を愛させる愛を見出すのである。」(15:6:10)
- 22 [6]
- 23 創造主の永遠性について論じている。(4:17:23)
- 24 「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」(ヨハ1:3, 4)
- 25 「実に、『造られたもの』はすでに、『御言において生命であった』のである。・・・しかも、これは何らかの生命ではなく、『生命は人間の光であった』。つまり、これは理性的な精神の光であり、人間はこの精神によって動物とは異なる。」(4:1:3)
- 26 「かくて、精神は神を想起し得るのである。・・・主に向かって、丁度、主から乖離されている時でも、或る仕方では触れられていたあの光に向かうように、主に向かって回心するため主を想起せしめられるのである。」(14:15:21)
- 27 「もし使徒がそのことを物体によって言うなら、それはこの物的な世界についても理解され得るであらう。私たちはこの世界においても物体によって生き動き在るのであるから。それで、神の似姿によって造られた精神に従って、このことがよりすぐれた不可視的・叡智的な仕方では理解されなければならない。」(14:12:16)
- 28 [6]
- 29 「しかし、聖書がこれほど賞揚し告知する愛(dilectio, charitas)は、善の愛(amor)でないなら、一体何であらうか。／しかし愛は或る愛する人の愛であり、愛によって或るものが愛されるのである。視よ、ここに三つのものがある。愛する人と愛されるもの、そして愛である。したがって愛とは愛する人と愛されるものという二つを一つにし、あるいは一つにしようとする或る生命で



ないなら、何であろうか。それは外的・肉的な愛についてもあてはまる。しかし、より純粹にして明らかな源泉から汲み取るために。私たちは肉を背後に措き精神に向って上昇しよう。友人において精神は精神以外の何を愛するであろうか。それゆえ、ここにも三つのもの、すなわち、愛する人と愛されるものと愛があるのである。・・・しかしまだ問い求めていたものを見出したのではなく、それを問い求める場所を見出したのである。私たちは、あたかも始めの経から残りの緯を織り出し得るように、このことを語ったことで満足しよう。」(8:10:14)

30 [7] p.45 : 注2)

31 「かくて、三位一体の或る似姿がある。つまり、精神そのもの、その子であり、それ自身についての言葉である精神の知、そして三番目の愛がある。この三つは一つのもの、一つの実体である。精神がその存在にふさわしいように、自己を知る限り、子は精神よりも小さくない。また精神はその知と存在にふさわしく自己を愛する限り愛は精神よりも小さくないのである。」(9:12:18)

32 付録[5] 29)「また、より容易に知解され得るように、特に第9巻では、可變的なものの中に在る三つのものを、それらは時の間隔によって別々になっているが、示そうとした。しかし、一つの人格のこの三つの能力は、人間の志向が要求するようには、あの神の三位一体の三つのペルソナに適應することはできない。それは、私たちがこの第十五巻で証明したとおりである。」(15:25:44, 45) : 第9巻の精神、知、愛の議論では、可變的なものと普遍的なものの違いを認識していない。普遍的な知の認識は第14巻で達していることに注意しなければならない。

33 「かくて三位一体の或る似姿がある。つまり、精神そのもの、その子であり、それ自身についての言葉である精神の知、そして三番目の愛がある。この三つは一つのもの、一つの実体である。精神がその存在にふさわしいように、自己を知る限り、子は精神よりも小さくない。また精神はその知と存在にふさわしく自己を愛する限り愛は精神よりも小さくないのである。」(9:12:18:4)

34 「特に、神の似像によって造られた理性的・知解的な被造物をとおして、またいわば鏡をとおして(I コリ13:12)のように、出来るなら、出来る限り、神なる三位一体を、私たちの記憶、知解力、意志において認めるように勧めた。記憶、知解力、意志というこの三つを各自は自分の精神において本性的に神的に配置されたものとして、鋭敏に観て、永遠にして不可變の本性を想起し、直観し、欲求することは精神にとって、どんなに偉大なことか、を記憶によって想起し、知解によって直視し、愛によって抱懷するのである。そこに精神は確かにあの至高なる三位一体の似像を見出す。」(15:20:39)

35 「実に、これらのすべての善において、すなわち私が今述べたもの、あるいは他の人が見たり考えたりするものにおいて、私たちが真実に判断するとき、もし私たちに善そのものの観念—それによって私たちは或るものを是認し、また或るものを他のものより優位に置くのであるが—が刻印されていないなら、或るものを他のものよりも善いと言わないであろう。かくて、この善あの善ではなく、善そのものである神を愛さなければならない。私たちが問い求めなければならないのは魂の善であって、それは魂が判断することによって、それを超越するべきものではなく、むしろ愛することによって固着すべきものである。」(8:3:4:2)

36 [7] p.43

37 「したがって、心は善くなるために、心たらしめるあの善に回心する。だから、心が意志の背離によっても失わなかったあの善が意志の回心によって愛されるとき、意志は心を善において完成するため、その本性に相応しく働くのである。心は最高の善から離反するとき善き心でなくなる。しかし、そのときも心は心でなくなるのではない。心は心であることで身体よりも優れている善であるから。だから、意志が自分の手に入れるものを失うのである。なぜなら、心はその存在の根拠に向って在り方を廻らそうと意志するために、すでに存在していたから。しかし心が存在す

る前には存在しようと意志する心は未だ存在していなかった。次のようなものが私たちの善である。私たちはその善において、存在すべきであったか、あるいは存在すべきであると了解するものがすべて存在すべきであったか、あるいは存在すべきであるか、ということを見るのである。また私たちはその善において、どうして存在すべきであったのか了解しないものもすべて、存在すべきでなかったなら、存在し得なかったことを見る。だから、この善は私たち各自から遠く離れて在るのではない。私たちはこの善の中に生き、動き、存在する（使徒17:27, 28）からである。」(8:3:5:2)

38 例として、原子核の強い相互作用を湯川は中間子と言う粒子で記述した。

39 [7] p.43, 44

40 [7] p.38, 39:「もし変らざる善が存在しないなら、いかなる移ろいやすい善も存在しないであろう。だから、これらのものがそれを分有することによって善である善そのものを観ることが出来るなら、そのとき、君は神を観るであろう。そしてもし君が愛によって神に寄り縋るなら、直ちに浄福にされるであろう。」(8:3:5:1)「しかし、善そのものを愛さないなら恥ずべきことである。心も、それが変らざる善へ回心することによってまだ善ではないときも心であるゆえにのみ心である。心はそれが造られるべきであったと見られる処でこそ、造られたものとして是認されるから。ここに真理があり、純一な善がある。それは善そのものに他ならず、それゆえにこそ、最高善でもある。(後略)」(8:3:5:2)

41 [3] p.34: 注11) 彼の有名な定式、「理解するために信じなさい」「信じるために理解しなさい」

42 マタイによる福音書を「たとえられる」または「たとえを」で検索すると22節ある。全25章から成るので、平均すればほとんどの章が「たとえ話」ということになる。マタイによる福音書には、イエスは弟子たちに、「だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見えず、聞いても聞かず、理解できないからである。」(マタ13:13)と語っている。

## 参考文献

- [1] アウグスティヌス, 中沢宣夫訳. 三位一体論. 東京, 東京大学出版会, 1989, 540p.
- [2] 金子晴勇編. アウグスティヌスを学ぶ人のために. 京都, 世界思想社, 1993, 273p.
- [3] 九里秀一郎, “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 研究ノート1”, 浦和論叢. Vol.54, 2016-2, p.33-61 (2016)
- [4] 九里秀一郎, “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 研究ノート2”, 浦和論叢. Vol.55, 2016-8, p.1-29 (2016)
- [5] 九里秀一郎, “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 研究ノート3”, 浦和論叢. Vol.56, 2017-2, p.97-125 (2017)
- [6] 九里秀一郎, “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 七つの聖句が描く三位一体論”, 浦和論叢. Vol.57, 2017-8, p.21-55 (2017)
- [7] 九里秀一郎, “アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛: 第8巻で論じられる信仰と真理の形而上学的対比”, 浦和論叢. Vol.59, 2018-8, p.33-50 (2018)
- [8] 服部英次郎. アウグスティヌス. 新装版, 東京, 勁草書房, 1980, 218p.
- [9] マクグラス, A・E・, 神代真砂美訳. キリスト教神学入門. 東京, 教文館, 2002, 804p.

## 図表

表1：『三位一体論』第1～14巻のテーマ

巻	見出し
1	三位一体の統一性と等しさ
2～4	三位一体の統一性と等しさ、御子と聖霊の派遣の問題
5	アリウス派の論駁
6	キリストの力と知恵
7	父なる神の知恵と力
8	父と子の大きさの問題、愛による三位一体の可能性
9	精神の視点から見る神の似姿
10	精神における記憶と知解力と意志の三一性
11	五官の一つである視覚を例とした精神の三一性
12	知識と知恵
13	キリスト教信仰と精神の三一性
14	人間の真の知恵と精神の三一性

注：[7] p.45 再掲

表2：意図的な引用の変更

巻	章	節	引用部分	変更ヶ所
4	1	3	それは私たち一人一人から遠く離れて置かれていないのではない。実に私たちは <u>その生命の中に生き</u> 、動き、在るのである。(使17:27, 28)。	神の中に生き → その生命の中に生き
4	17	23	私たちは <u>この創造主においてこそ生き</u> 、動き、存在する (使17:28)	神の中に生き → この創造主においてこそ生き
8	3	5	だから、 <u>この善は</u> 私たち各自から遠く離れて在るのではない。私たちは <u>この善の中に生き</u> 、動き、存在する (使17:27, 28) からである。	神は → この善は 神の中に生き → この善の中に生き
14	12	16	使徒が言うように、神は、「わたしたち各自から遠く離れていますのではない」(使17:27)。使徒はさらに付加して、「なぜなら、私たちは神の中に生き、動き、在るからである」(使17:28) と言う。	(変更なし)
14	15	21	神は全体として偏在したまうのである。このゆえに、 <u>精神は神の中に生き</u> 、 <u>動かされ</u> 、存在するのである (使17:28)	私たちは神の中に生き → 精神は神の中に生き 動き → 動かされ

注：[6] p.25 一部加筆

表3：特に長い引用

巻	章	節	聖書	引用文	節数 総字数
5	13	14	I コリ	12:7 一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。・・・12:11 これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。	5節 249字
8	9	13	II コリ	6:2 なぜなら、／「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。・・・6:10 悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのように、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。	9節 445字
13	1	2	ヨハ	1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。1:2 この言は、初めに神と共にあった。1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。・・・1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。	14節 487字
15		33	ヨハ	4:7 サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。・・・4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」	8節 470字

注：[6] p.24

表4：7つの聖句（三位一体論の主要な聖書的根拠）

聖書	聖句	巻：節	1-14	15	計
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。	1:16 1:16 1:21 1:28 1:31 2:28 3:9 3:10 5:1 7:7 8:6 9:1 12:22 12:22 13:26 14:4 14:11 14:25 15:14 15:20 15:20 15:21 15:21 15:21 15:22 15:22 15:24 15:26 15:27 15:39 15:40 15:41 15:44	18	15	33
ヨハ	1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。	1:9 2:9 2:11 3:3 4:4 4:28 7:4 7:4 13:2 13:12 13:22 13:24 13:24 14:24 15:20 15:20 15:46 15:46	14	4	18
ヨハ	1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。	1:9 1:12 1:14 1:22 2:14 2:25 2:27 4:3 7:1 13:2 15:20 15:20 15:38	10	3	13
I ヨハ	3:2 愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。	1:17 1:31 2:28 4:5 12:22 14:24 14:25 14:25 15:14 15:21 15:22 15:26 15:26	8	5	13
ヨハ	15:26 わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。	2:5 4:28 4:29 5:12 5:15 12:5 13:14 15:45 15:48 15:51	7	3	10
ロマ	1:20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。	2:25 4:21 4:23 6:12 13:24 15:3 15:10 15:39	5	3	8
I ヨハ	4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。	6:7 8:10 8:12 9:1 15:5 15:10 15:27	4	3	7

注：[6] p.49 聖句文を挿入

表5：第8巻の引用聖句

章 節	聖書	文	巻：節	8巻 以上	総 件数
2	3 黙  I ヨハ	5:11 また、わたしは見た。そして、玉座と生き物と長老たちとの周りに、多くの天使の声を聞いた。その数は万の数万倍、千の数千倍であった。 1:5 わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということです。	8:3  7:4 8:3 8:12	1  2	1  3
3	5 使  使	17:27 これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。 17:28 皆さんのうちのある詩人たちも、／『我らは神の中に生き、動き、存在する』／『我らもその子孫である』と、／言っているとおります。	4:3 8:5 14:16  4:3 4:23 8:5 14:16 14:21	2  3	3  5
4	6 II コリ  I コリ   マタ  I コリ  1 テモ	5:7 目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです。 13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。  5:8 心の清い人々は、幸いである、／その人たちは神を見る。 13:13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。 1:5 わたしのこの命令は、清い心と正しい良心と純真な信仰とから生じる愛を目指すものです。	1:17 2:28 8:6 14:4  1:16 1:16 1:21 1:28 1:31 2:28 3:9 3:10 5:1 7:7 8:6 9:1 12:22 12:22 13:26 14:4 14:11 14:25 15:14 15:20 15:20 15:21 15:21 15:21 15:22 15:22 15:24 15:26 15:27 15:39 15:40 15:41 15:44  1:17 1:28 1:31 8:6 8:6 8:6 15:44	2  23  1 1 2	4  33  4 1 2
6	9 ロマ	13:8 互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあつてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。	8:9	1	1
7	10 マタ  マタ マタ マタ ロマ  I コリ  ロマ  ガラ ガラ マタ  I ヨハ	22:37 イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』 22:38 これが最も重要な第一の掟である。 22:39 第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』 22:40 律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。 8:28 神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、を、わたしたちは知っています。 8:3 しかし、神を愛する人がいれば、その人は神に知られているのです。 5:5 希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。 6:2 互いに重荷を担いなさい。そのようにしてこそ、キリストの律法を全うすることになるのです。 5:14 律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。 7:12 だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である。 4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。	2:28 6:7 8:10 10:9  2:28 6:7 8:10 2:28 6:7 8:10 2:28 6:7 8:10 15:30 15:46 8:10 13:20 8:10 9:1 7:5 8:10 13:14 15:31 15:32 8:10 8:10 8:10 6:7 8:10 8:12 9:1 15:5 15:10 15:27	2  1 1 3 2  2 4  1 1 1 6	4  3 3 5 2  2 5  1 1 1 7



7	11	マタ	11:28 疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。	8:11 9:14	2	2
		I コリ	13:4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。	8:11	1	1
		I ヨハ	4:8 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。	7:6 8:11 8:12 8:12 15:31 15:37	5	6
8	12	I ヨハ	4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。	6:7 8:10 8:12 9:1 15:5 15:10 15:27	6	7
		I ヨハ	2:10 兄弟を愛する人は、いつも光の中におり、その人にはつまずきがありません。	8:12	1	1
		I ヨハ	4:7 愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。	8:12 15:31	2	2
		I ヨハ	4:8 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。	7:6 8:11 8:12 8:12 15:31 15:37	5	6
		I ヨハ	4:8 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。	7:6 8:11 8:12 8:12 15:31 15:37	5	6
		I ヨハ	4:20 「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。	8:12	1	1
		I ヨハ	1:5 わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということです。	7:4 8:3 8:12	2	3
9	13	II コリ	6:2 なぜなら、／「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。	8:13	1	1
		II コリ	6:3 わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように、どんな事にも人に罪の機会を与えず、	8:13	1	1
		II コリ	6:4 あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、	8:13	1	1
		II コリ	6:5 鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても、	8:13	1	1
		II コリ	6:6 純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、	8:13	1	1
		II コリ	6:7 真理の言葉、神の力によってそうしています。左右の手に義の武器を持ち、	8:13	1	1
		II コリ	6:8 栄誉を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしているのです。わたしたちは人を欺いているようでいて、誠実であり、	8:13	1	1
		II コリ	6:9 人に知られていないようでいて、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはならず、	8:13	1	1
		II コリ	6:10 悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。	8:13	1	1

注：引用聖句は新約のみ。

表6：第8巻引用聖句の集計（節単位）

章	節	引用数	全巻	8巻以上
序	1	・	・	・
1	2	・	・	・
2	3	2	4	3
3	4	・	・	・
	5	2	8	5
4	6	5	44	29
	7	・	・	・
5	7	・	・	・
	8	・	・	・
6	9	1	1	1
7	10	11	34	24
	11	3	9	8
8	12	7	26	22
9	13	9	9	9
10	14	・	・	・
総計		40	135	101

注：表5の集計。

表7：第8巻使用単語の頻度

章	節	段	単語	回数
1	1	1	言	8
			神	7
			善	6
			聖霊	5
			全能	5
			三位一体	4
			ペルソナ	4
			三位一体御自身	3
		2	三	5
			ペルソナ	3
	2	1	出来	3
			真理	6
		2	偉大	6
			多	6
			所有	6
			真実	5
			存在	3
		3	子	10
			父	9
			真実	8
			聖霊	6
			同	5
2	3	1	大	6
			心	6
			真実	5
			物体	4
		2	神	8
			思惟	4
			天体	3
		3	君	7
			光	5
			真理	5
	4	1	善	23
			善	13
			心	27
		3	善	15
			意志	6
			働	6
		5	1 善	12
			君	4
		2	善	22
			心	20
			存在	13
3	4	1	善	23
			善	13
			心	27
		3	善	15
			意志	6
			働	6
		5	1 善	12
			君	4
		2	善	22
			心	20
			存在	13
	5	1	善	23
			善	13
			心	27
		3	善	15
			意志	6
			働	6
		5	1 善	12
			君	4
		2	善	22
			心	20
			存在	13
4	6	1	善	4
			神	3
			愛	10
		2	神	7
			得	6
			心	6
		7	1 表象	3
			或	3
		2	人間	4
			謙虚	3
	7	1	謙虚	3
			知	6
			マリア	4
		8	1 三位一体	17
			知	14
			愛	11
			信	10
			何	8
			見	6
	9	1	愛	4
			人間	3
		2	心	13
			知	8
			身体	7
			生	6
			意識	5
		3	何	4
			知	4
			心	4
	10	4	義人	23
			愛	8
		5	義人	11
			知	9
		6	何	8
			人	6
			心	6
		7	自分自身	3
			アレクサンドリア	7
			カルタゴ	6
5	7	1	善	4
			人間	3
		2	心	13
			知	8
			身体	7
			生	6
			意識	5
		3	何	4
			知	4
			心	4
	8	4	義人	23
			愛	8
		5	義人	11
			知	9
		6	何	8
			人	6
			心	6
		7	自分自身	3
			アレクサンドリア	7
			カルタゴ	6
6	9	1	善	4
			人間	3
		2	心	13
			知	8
			身体	7
			生	6
			意識	5
		3	何	4
			知	4
			心	4
	10	4	義人	23
			愛	8
		5	義人	11
			知	9
		6	何	8
			人	6
			心	6
		7	自分自身	3
			アレクサンドリア	7
			カルタゴ	6
7	10	1	善	4
			人間	3
		2	心	13
			知	8
			身体	7
			生	6
			意識	5
		3	何	4
			知	4
			心	4
	11	4	義人	23
			愛	8
		5	義人	11
			知	9
		6	何	8
			人	6
			心	6
		7	自分自身	3
			アレクサンドリア	7
			カルタゴ	6
8	12	1	善	4
			人間	3
		2	心	13
			知	8
			身体	7
			生	6
			意識	5
		3	何	4
			知	4
			心	4
	13	4	義人	23
			愛	8
		5	義人	11
			知	9
		6	何	8
			人	6
			心	6
		7	自分自身	3
			アレクサンドリア	7
			カルタゴ	6
9	14	1	善	4
			人間	3
		2	心	13
			知	8
			身体	7
			生	6
			意識	5
		3	何	4
			知	4
			心	4
	15	4	義人	23
			愛	8
		5	義人	11
			知	9
		6	何	8
			人	6
			心	6
		7	自分自身	3
			アレクサンドリア	7
			カルタゴ	6

注：段落ごとに集計、回数が6回以上および回数3回以上でかつ単語の総文字数が段落文字総数の1%を超えるもの計147件を掲載。ただし「私」「彼」は除外。（〔7〕表1再掲）

## 謝辞

この研究は多くの精神的な障害を持つ方々との交流から始まりました。キリスト教の教会活動や職場、福祉施設での経験は私にとってたいへん貴重なものでした。2018年9月、名古屋で開催された日本基督教学会において、東京神学大学名誉教授の近藤勝彦先生、関西学院大学教授の土井健司先生と三位一体論についてお話できる機会に恵まれました。日本を代表する組織神学者である近藤先生からは、アウグスティヌスの三位一体論には現代も研究する意義が十分にあることを伺い、たいへん励まされました。ここに感謝いたします。

## Summary

The concept of love of one's neighbor as drawn from Augustine's Trinity theory:  
A Psychological Analysis of the Converted Mind in Volume 8

Shuichiro Kunori

This thesis is the second paper to consider how Augustine's Trinity theory evokes the love of one's neighbor. The original theology, which can be said to be the trinity theory of love, starts with his Volume 8, while the trilogy model of the spirit is established in the final book, Volume 15. This model of memories, knowledge, love, or will is an excellent analogy of God as the Trinity. However, while this model has a strong expression of self-love, the relationship to the love of one's neighbor is not clear. Therefore, this research focuses on the relation between this model and the love of one's neighbor, focusing on the related discussion and biblical quotations. This thesis covers Chapters 3 to 5 of Volume 8 and deals with Augustine's earlier awareness. He realized that the mind turns to good through a trinity consisting of "spirit," "heart," and "will." In addition, he drew a basic concept of the original Trinity theory based on the contrast between the heart that loves goodness and the heart that loves God. He also realized that knowing by reason and understanding by faith are complementary and found that the way to know the invisible God is through "similarity and comparison." These are important views for interpreting the theory of Trinity based on the love for one's neighbor.

**Keywords** Augustine, the Trinity, Neighbor Love, Volume 8

(2018年11月8日受領)



